

憧憬の地ブルターニュ ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷

国立西洋美術館(上野公園) 23.03.18~06.11



フランス北部の大西洋に突き出た半島を核とした「ブルターニュ地方」は、断崖の連なる海岸線に岩々が覆う荒々自然で、奇怪な岩と断崖の絶景が見られる。

先史時代の巨石遺構や独特な宗教的モニュメントがあり、古来より特異な文化圏を形成した景勝地は、かつては「クールベ」や「ドラクロア」も魅了した。

この地の2つの断崖に挟まれた海岸は、夏の観光地で、「モネ」は度々訪れて「60枚」余の作品を残している。

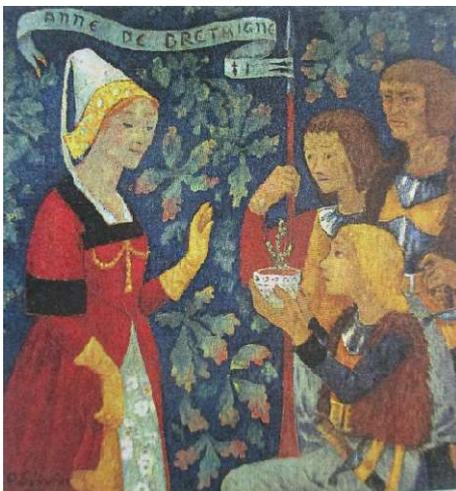
本展は、そんな「ブルターニュ」に魅せられた画家たちは、19世紀後半～20世紀にかけて、新たな画題を求める画家たちが度々訪れて主題作品を描いた。

この「ブルターニュ」に魅せられた「モネ」「ゴーガン」「黒田清輝」らの画家たちの作品や関連資料が一堂に会する初めての展覧会の開催である。

出展数は、30か所から選りすぐられた「ブータン」など50人以上の作家による絵画・版画・素描など「約160点」で、なかでも「ゴーガン」の作品は「10点」以上が**集結**し、造形様式の変遷を段階的に観賞することができる。

クロード・モネ《ポール＝ドモワの洞窟》 1886年 油彩/カンバス 上図

本作に描かれているポール＝ドモワの洞窟は、ブルターニュ半島にある南の島ベリール(美しい島の意味)の海岸にある大きな洞窟である。



ポール・セリュジエ《ブルターニュのアンヌ女公への礼讃》 1922年

画伯は、ポスト印象派の中でも反自然主義をめざす「ナビ派」を結成して結束につとめた画家として知られている。この「ナビ」とは、ヘブライ語で「預言者」を意味していて、新しい絵画を目指していく彼らの意気込みを感じさせる。本作は「アンヌ女公」と呼ばれるブルターニュ公国最後の君主を描いた作品である。